

平針南学区

「地域ささえあい事業 /ささえあい相談室の活動」

平針南学区地域福祉推進協議会/地域ささえあい事業
ボランティアコーディネーター（現在 学区自治会長）
浅井 正明

天白区平針南学区では、「地域ささえあい事業」が5年目を迎えました。平針南地域福祉推進協議会と天白区社会福祉協議会が事業主体となって、ボランティア約180人が自治会・八千代会（老人クラブ）などの協力を得て、高齢者の困りごとや見守りに対応しています。その取り組みを紹介します。

（任期2年）の選任、予算・決算、主要事業、地域課題など議事の審議を行っています。また、会長の下に8人の副会長で役員会を構成し、各事業を分担しています。

□平針南学区の概況

愛知県が山林を開発し、県営住宅1,295戸、分譲住宅481戸、公務員宿舎96戸、運転免許試験場を建設し、1964年から入居が始まりました。間もなく平針団地自治会と小学校が設立され、10年程経た後、組織体制と運営方針を刷新し、現在の平針南学区自治会（学区全体で1自治会・コミセンに事務局を置く）になりました。自治会のほかにも学区内に地域福祉推進協議会を始め、多くの活動団体が設立し、相互に協力して地域社会の向上に努めています。近年、住宅開発やマンション建設等で新たな住宅地が広がり、多くの若い世帯が居住しています。2020年4月1日現在、2,605世帯、人口6,376人（高齢化率27%）を擁し、自治会は9割弱の世帯が加入し、27街区に分割され、街区長（区政協力委員を兼ねる）の下に数人の代議員（組長）が立ち、自治会活動に携わっています。議決機関である街区長会議は毎月開催し、自治会長



□自主的な地域づくりの土壌

地域ささえあい事業・ささえあい相談室活動が生まれたのは、これまでの自治会や地域福祉推進協議会、その他の団体による自主的な活動が土壌になっています。

1. 自主的な地域づくりの始まり

平針ニュースは、住民同士の情報共有とガラス張りの自治会運営を目的に1975年10月に刊行し、45年間休まず発行し、現在毎月3,000部(A-3両面)を学区全世帯及び関係行政機関等に配布しています。住民にとって地域のできごとや課題・住民活動や地域団体の活動を知り、活動に参加するための欠かせないツールになっています。また、ホームページとブログも配信しています。

2. ニュース発行から10年が過ぎる頃から自主的な取り組みが行われてきました。

新たな活動の取り組みは、平針ニュースに逐一掲載され、多くの住民に関心の広まりと活動への参加が促されました。活動の多くは自治会とは別に、新たな実行組織を立ち上げ自治会から助成を受けて活動しています。

- 手作りの料理で月1回のふれあい食事会を35年、月3回の配食を24年続けている。(※地域福祉推進協議会は昭和60年民生児童委員協議会を中心に設立され、ボランティア約70名で幅広く地域福祉活動している。)
- 産地直売の生鮮食品の販売26年(自治会)
- 子どもに本の貸し出しや読み聞かせ27年(おもしろ文庫)
- 学区内の名大教員等、知識人を活用したおもしろセミナーの開催23年(文化活動推進委員会)
- 学区内に保全された里山(でこぼこ山)自然観察会や保全活動16年(でこぼこ山自然クラブ)
- 個人団体が協力して小学生・中学生の通学見守り活動15年(あったかネット)
- 地域委員会・リボン委員会の活動8年、4つの柱と20の個別事業を実施しウォーキング大会や子どもまつりなど多くの事業は継続して実施している。(リボン委員会)



- 細口池のツバメのねぐら復活と生物多様性の保全活動8年(細口池生きもの復活クラブ)
- 学区の花ナデシコ始めセイロンウリの育成6年(ナデシコの花咲かせ隊)
- 細口池公園のスイセンの育成活動4年(スイセンを育てる会)
- 平針団地旧集会所跡地や建て替え跡地の有効活用を計画2年(まちづくり検討会)
- 地域福祉推進協議会の数々の福祉活動
 - ・ふれあいサロン11年・にこにこ健康サロン4年
 - ・男の料理教室7年
 - ・子育てサロンぴよっこ7年・親子ふれあい教室3年
 - ・福祉まつり18年・福祉学習会3年など
 - ・平針南地域ささえあい事業4年(見守りボランティ



7158名・お助けボランティア27名)

口ささえあい事業/ささえあい相談室の活動

1. ささえあい事業を取り組む動機

○地域委員会で行った全世帯アンケート（40%の回収率）の結果、高齢者の皆さんから多くの心配事が寄せられました。

- ・いつまで健康でいられるか心配
- ・買い物するところが近くなって不便
- ・ゴミ出しや草取り家事などが不安
- ・近くに話し相手や相談相手が居ない
- ・健康、介護、孤独死が心配。などなど

○民生児童委員協議会が行ったアンケートでも、一人暮らしで不自由なことは？

- ・買い物・掃除・洗濯の家事・高所作業・ゴミ出し・体調を崩したとき・寂しい
 - ・移動手段などなど、の声寄せられました。
- 地域福祉推進協議会は、社会福祉協議会や自治会と話し合い、「地域ささえあい活動連絡会議」を設置し、事業の内容や活動を進める仕組みなどをまとめました。

2. ご近所ボランティアコーディネーターの募集

活動の軸となるボランティアコーディネーターを平針ニュース等で公募、4人(地域に恩返しや貢献したいという思いがある人)が応募、社協で面接し2人を任用しました。

3. 「ささえあい相談室」の活動

2016年4月、コミセン2階に相談室を設置し、ボランティアコーディネーター2人が交替で火曜日・金曜日午前9時～12時に業務を行っています。コーディネーターは、地域福祉推進協議会会長と社会福祉協議会の下で次の業務を遂行しています。「活動内容の企画」「活動の広報」「利用者やボランティアの募集・面会・連絡調整」「活動の実施及び活動実績の作成」「社会福祉協議会との連絡調整」「連絡会議・ボランティア交流会・見守りマップ作りの招集と運営」他

4. ボランティアの募集

初回はH28年2月の平針ニュースにささえあい事業について掲載し、ボランティアの募集を呼びかけました。そして、各種集会や知人を通じて直接呼びかけるなどでボランティア18名が手を挙げ、お助けボランティア説明会を開催しました。その後、民生委員やコーディネーターが

直接声掛けしてボランティアを徐々に増やしていきました。

5. ボランティアの活動（お助けボランティアと見守りボランティア）

【お助け活動】

(1)お助け活動の動機

高齢者が苦勞して資源(古新聞や書籍等)を持ち出す様子を見かけたり、資源を持ち出せないという声がありました。一部でご近所同士の助け合いは見られましたが、地域全体で持続的に行うにはささえあい事業で取り組む必要があり、月に1回の回収であれば可能ということでスタートしました。

(2)令和元年度の実績

- ①資源回収（自宅から集積場所まで運ぶ）利用者26人、ボランティア18人。
- ②粗大ゴミの搬出、利用者9人、ボランティア31人(延べ)。
- ③照明器具の交換利用者7人、ボランティア14人(延べ)。火災警報器の取り替え、その他、樋の詰まりや外れ修繕などを行いました。情報交換や相互交流を目的にお助けボランティア交流会を毎年開催しています。

【見守り活動】

活動を始めて5年目になりました。見守りボランティア158人が、19の街区で実施しています。

(1)見守り活動の動機

民生委員の訪問活動(月1回程度)と近所同士のそっと見守り活動の補完的効果を期待されていた。自治会から災害時の救出や安否確認のため見守りの必要性の声があった。支え合い事業を検討している最中に孤立死が発生した。

(2)ボランティア活動の進め方

- ①高齢者の多い地区を順に選定し、その地区から参加者を依頼し見守りマップ作りを通して





見守りの必要な方を抽出しました。そして、マップづくり参加者にボランティアを要請しました。

- ②見守りの方法は、外からそっとポストや洗濯物、照明など確認し、異常を感じたら民生委員か社会福祉協議会に通報します。
- ③活動が1年経過したところで再度集合して(新たなボランティアを加える)情報交換し、見守りが必要な方を地図に落とししました。また、見守りボランティア交流会を開催しています。

(3)救出例

- ①ボランティアがポストに新聞が溜まっているのを発見し、民生委員に通報、民生委員が家族と消防に連絡、消防が室内で倒れているのを発見し病院に搬送。3件。
- ②ボランティアが雨戸が閉まらず、電気もつかないのを不審に思い、民生委員・関係者に連絡、室内で倒れているのを発見、毎日訪問している介護者に連絡し大事に至らなかった。1件。
- ③高齢者の集まりに欠席し、民生委員とボランティアが夕方になっても布団が取り込まれないのを見て、入ろうとしても鍵がかかっていたので身内を呼び、倒れているの発見し搬送。1件

(4)見守りボランティアの声

- ①周りを見たり、気に留めたりしながら散歩するようになった。
- ②家の外からの見守りなので、大きなプレッシャーもなく気軽にできている。
- ③さりげない声掛けはその方に寄り添い、人とのつながりが円滑にいくように思える。
- ④年齢に関係なく元気な人ができることを助け合っていきたい。
- ⑤高齢でも、自分が健康で他人の役に立てることの喜びを感じる。

- ⑥日頃の人間関係を作ることにもつながっている。
- ⑦行事などになるべく参加してもらえよう声掛けをするとよい。

(5)見守り活動をやってみて感じたこと

- ①ご近所の方のもっている情報量の多さを認識した
- ②見守りの意識づけができ、地域全体へ広がりを見せている
- ③民生委員の参加により、民生委員の活動や見守り活動を身近に感じてもらった
- ④民生委員もご近所で見守っていただくことで助かっている
- ⑤ご近所の顔見知りづくりやコミュニケーションは減災の一助になっています。

□成果と課題

- ①お助け活動利用者が、配食やサロンを利用するようになったり、買い物途中で動けなくなっていたり、寝たきりになったり、見えなかった人の顔が見えて地域で支えることができています。
- ②最も支援を必要としている災害弱者は、ご近所に顔見知りがいない方といわれています。ささえあい活動を通じてご近所の顔見知りやコミュニケーションが育っています。
- ③従来の地域福祉推進協議会の事業も、ささえあい事業も他の団体と連携をとりながら、どの団体の会員であるかを超えてボランティアとして共通に関われるようにしていかなければなりません。社会福祉協議会と協働し地域に活動の輪を広げていくことが肝要です。
- ④ささえあい活動は、圧倒的に高齢者率が高い北部中央部の県営住宅や旧住宅街が中心となっていますが、逆に、子どもが圧倒的に多い西南部の新住宅街においては、新たなささえあい活動を展開する必要が生じています。
- ⑤ささえあい活動が、サービスの低減が危惧される介護保険制度の一端を担うためには、本当に困っている人に対して様々なささえあい活動を実施し、いつまでもこの地域で生活できるように支援することが求められます。この時行政サービスとの線引きが課題となります。